

【研究ノート】

中国科幻小说の諸相（3）

—— 中国大陸SFと台湾SFの現状 ——

山 本 範 子

研究ノート

中国科幻小说の諸相 (3)

—— 中国大陸SFと台湾SFの現状 ——

山 本 範 子

目次

1. 2010年日本SF大会
2. 中国大陸SFについて(補足)
3. 台湾SFと周辺の現状

1. 2010年日本SF大会

(1) 中国SF企画ゲストについて

2010年8月7日、8日と東京で第49回日本SF大会(TOKON10)¹が開催された。

二日目の8日、午前9時半から11時まで中国からのゲストによる自主企画(筆者主催)が行われた。

ゲストについては中国SF研究者、作家である呉岩氏(北京師範大学教授)²と相談の上、未来を担う若手SF関係者にお願いすることとなった。

今回、ゲストの目玉になったのがSF作家の夏笈氏³である。彼女は中国ではその美貌からアイドル作家的立場にあるが、同時に叙情的な作品を中心に多く発表している。ただ、その作品はハードSFではなく、ソフトSF、それもむしろFTよりの場合が少なくなく、彼女自身も自らの作品を「豆腐SF」と呼んでいる。

日本でもかつて『SFマガジン』(早川書房)で「カルメン」が翻訳されており⁴、その繊細な心理描写には注目が集まっていた。

また彼女は小説を発表するだけでなく、若

手を育てる活動にも熱心で、書き方についての講演なども積極的に行っている。

もう一人の中心人物はSF関連ライターであり、SF作家、編集でもある梁清散氏⁵である。彼は日本のアニメやゲームから独学で日本語を学んだというほどの日本文化好きで、今回の訪日団の中心として奔走してくれた。

この二名に企画での発表をお願いし、だいたい一人30分程度の中国SFについての紹介をしてもらった。

その他、発表はしないがゲストとして訪日したメンバーは以下の通り。

任紫玉、姚嵩、赵馨源、邓韵、胤祥⁶。

彼らの訪日に際しては、この日本SF大会だけではなく、早川書房や東京創元社の訪問も行い、それぞれ編集者の方々には接待の時間をいただき、盛んに意見交換を行わせていただいた。ご多忙な中、時間を割いていただき、感謝の念にたえない。

また日本SF作家クラブ有志による歓迎夕食会も催され、会長の新井素子氏はじめ多くの会員が参加、中国からのゲストたちを暖かく迎えてくださった。

中国ゲストたちは秋葉原ほか日本を観光し、「ナマの日本」を実感していた。今後の日中交流に大いに期待したいものである。

(2) 中国SF企画について

およそ30席ほど用意された会場は8割ほど埋まっており、ゲストの発表に感嘆の声が上がるなど、おおむね好評であった。

中国側の発表者は前述した夏笈氏と梁清散氏で、司会は筆者、日本側ゲストは作家のひかわ玲子氏⁷、通訳に徳久圭氏⁸という布陣であった。

まず梁清散氏による中国SFの現状についての報告がなされた。2007年の世界SF大会(横浜)⁹で、SF作家の韓松氏¹⁰、呉岩氏らが中国SFについて発表した¹⁰が、その内容は中国SFの成立から発展までであった。

今回の梁氏の発表は、それらを受けて、新しい世代を中心とした「今」を伝えることに主眼がおかれていた。

タイトルは「中国科幻近几年」(ここ数年の中国SFについて)である。詳しい内容は割愛するが、主な点は以下の通りである。

近頃の中国SFのキーワードは「民間化」である。様々な雑誌社やいろいろな媒体などに広がり、受け入れられるようになった。

老舗SF雑誌『科幻世界』¹¹について。創立30周年になる。2008年には中国出版政府賞を受賞した。この科幻世界雑誌社はほかにも翻訳ばかりのSF雑誌、或いはFT専門雑誌なども発行している¹²。

ここ数年は特に日本のSF小説も積極的に翻訳紹介している¹³。



最近重要な位置を占めているのが『九州幻想』¹⁴という雑誌である。内容はSFとFTで、2002年にインターネット上で作家たちが架空世界「九州」を作り、2005年にそれに基づい

た雑誌として創設した。九つの州にさまざまな民族が暮らす、シェアード・ワールドである。文学方面だけでなく、デジタル技術を用いての世界や人物、文化などを創作している。今はさらにネットゲームなどへの発展を計画している。今回訪日した夏笈氏もこの重要な作家の一人である。

さらに『新幻界』¹⁵が挙げられる。これはインターネット上での無料雑誌である。2009年4月より現在まで、質の高い作品を発表しつづけている。SFやFTといった分類分けをしないことが特徴的である。(ただしこの考えは、『九州幻想』も同じである)また、『科幻世界』と『九州幻想』の読者層は中高生が中心であるが、『新幻界』の読者層は比較的大人向けである。そのため誌面での制限がなく、内容や形式において自由に発表できる。性的な表現も可能であるし、幻想的な詩も発表されている。また文字媒体だけでなく、音声小説などの新しい表現方法にも挑戦している。

上記三つの雑誌に加えて、42工作組¹⁶というSF組織が2009年秋に発足した。これは北京のSFファンが中心で、作家、評論家、出版関係者、研究者、高校生や大学生などで組織され、毎週末にさまざまな場所で授業を開講している。夏笈氏も主要な講演者の一人である。

特筆すべきは、2010年に、中国で初めて、SFファンによる「中文幻想星空賞」¹⁷というファン大賞が設立されたことであろう。対象になるのはSFやFT作品である。

第一回中文幻想星空賞の受賞作品は次の通りである。

最佳中長編小説賞:江南『上海堡垒』

最佳短編小説賞:韓松『暗室』

最受歡迎翻訳小説賞:丁丁虫翻訳による筒井康隆『穿越时空的少女』(日本タイトル『時をかける少女』)

特別貢献賞:九州幻想編集部

梁氏の発表で最も聴衆を驚かせたのは、インターネット上の無料雑誌の存在であった。日本のSFでは当時、まだそのようなものはなく、中国SFのほうはずっと進んでいるということに、衝撃を受けたようであった。

なお、日本では日本SF作家クラブ有志による無料インターネット上雑誌が2011年春に設立された¹⁸。こちらも小説だけではなく、評論や書評など幅広い形態を扱っており、今後の展開が大いに期待される。

つづいて夏筋氏の発表が行われた。タイトルは「中国科幻的“新生代”与“后新生代”」(中国SFにおける「新生代」と「後新生代」)。主な内容は次の通りである。

新生代とは1990年から現在までを指し、『科幻世界』や『科幻大王』の二冊の雑誌を活躍の場とした、一群の作家たちのことである。代表的な作家として、星河、楊平、苏学军、凌晨、赵海虹、刘维佳、柳文扬、王晋康、何夕、潘海天、刘慈欣、韩松、などである。

これらの作家たちの年齢は三十歳過ぎから六十歳過ぎまで幅広く、1990年代後半から現在に至るまで重要な作品を発表している。

1980年代後期に政府による政策方面の問題で、SF衰退期があったが、これらの新生代作家たちは一冊もSFが出版されない時から今の繁栄した局面まで、中国SF復興を担ってきた。今の若者たちも、彼らの作品を読んで育ったといえよう。

続いて、具体例として刘慈欣の《流浪地球》、《球状闪电》、韩松の《美女狩猎指南》、《地铁惊变》、潘海天的《大角快跑》、《看不见的城市》などを挙げ、各作家はそれぞれ「技術の美」「奇異の美」「幻想の美」を代表していると考えられていると説明した。

後新生世代は1980年代以降に生まれた作家たちのことである。新生代の作品を読んで成長した若者たちで、独特のスタイルや潮流を

持ち、ガラスの壁(SFは子どもの読み物であるという偏見、ハードSFからの観点、商業的な問題など)を打ち破ろうとしている。

具体例として四人の男性作家、陈楸帆《甯川冻记》、飞氲《一个末世的故事》、《去世的慢慢旅途》、长铗《674号公路》、《奉家山》、马伯庸《风起陇西》などを挙げ、ほかにも多くの作家や作品を顔写真つきで紹介した。女性作家としては、程婧波《像苹果一样的思考》《赶在陷落之前》、迟卉《卡勒米安墓场》《归者无路》、陈茜《迅行十载》や自身の作品を紹介した。

夏筋氏は「科学性の薄い」SF、ソフトSFよりも科学性が薄い作品と呼ばれている。岩上治氏はかつて彼女の『カルメン』を翻訳した際に、「学園小説」の雰囲気があると評した。これについては彼女も「なるほど」と納得したとのことで、「自分の作品には多分にライトノベル的、学園小説的、青春小説的な雰囲気がある」と認めておられた。

最後に中国のSF映画について言及。中国SFはアメリカや日本より遅れており、ゆっくりと成長している最中であるとのことであつた。今回紹介した『parapax』という小作品は、夏筋氏が編集、主演したSF映画である。彼女は一人三役、物理学の博士、SF作家、映画編集を演じ分けた。この作品の中で、主人公たちは「何がSFなのか、何が映画なのか」ということについて深く考察している。これは日本アニメの今敏監督作品『paprika』¹⁹に似ている。ほかに、大学生が作成した低予算映画、張凡夕氏の『湍流』は小林泰三氏の『酔歩する男』²⁰を改編したものである。

以上が夏筋氏の発表である。作家一人一人の顔写真、性格やあだ名、作風や作品紹介など非常に分かりやすいものであつた。

日本の作家作品を改編したという紹介部分ではどよめきが起こり、「たぶん本人も知らな

いと思う」「見てみたい」という声が拳がったのが印象に残っている。

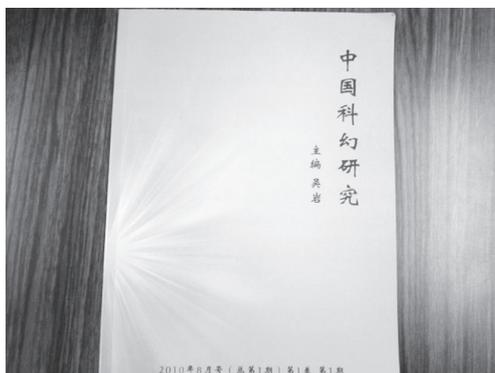
大ざっぱではあるが、中国ゲスト二名の発表はこのように、今の中国SFの息吹を伝えるもので、興味深い内容であった。

今後も日中SF間の交流を強く願うばかりである。

2. 中国大陸SF小説について (補足)

日本SF大会の中国企画以外での情報としては、『中国科幻研究』²¹という紀要が2010年8月に創刊されたことが挙げられよう。主編は呉岩氏で、現役の作家から若手研究者まで多くが参加している。

内容としては、特別寄稿として「“新世紀十年文学”国際検討会発言稿」や、「科幻理論」、「作家作品研究」、「書評和影評」、「動態」という項目があり、それぞれ数編ずつ、中国SFだけでなくアメリカの作家論など、時代も晩清から現代まで幅広くとられている。



世界華人科幻協会²²が中心となっているが、この協会は<http://sfa.kehuan.net/>に正式なHPを置いている。拙稿執筆時では、第二回星雲賞²³の募集をしているところであった。要項によると、中国大陸に限らず、世界中の中国語で発表された作品が対象となるらしい。また賞の種類も全部で10個あり、それぞれに推薦作品が記されていた。興味深い点

では「携帯小説」で長編・中編・短編部門が設立されていたことである。中国ではネット小説が人気を博し、それが出版されて更に売れるという現状だと聞いてはいたが、ネット小説を飛び越して携帯小説が対象になっているというのは面白いといえよう。

また「更新世代科幻小説」という言葉が出ており、ますます新しい世代が生まれているようである(2008～2010年内に発表した作品と記されていた)。

そのほかこのHPでは中国SFに関する様々な情報が載せられており、新刊の紹介、SF映画製作スタッフの募集などが記されていた。もちろん海外の情報もあり、ほかにもゲーム、映画、テレビなどの項目もあり、充実した誌面となっている。

そのほか、科幻世界による正式なHP、作家たちの個人ブログやHPなど²⁴情報源は豊富になり、十年前のように出版物を入手しなくてもダウンロードして読むことのできる作品が増えたことも特徴の一つといえよう。

最近ではiPadやAndroid専用のアプリ(ダウンロードして読める作品)も発売されている。

現実がひと昔前のSF小説に追いついたような勢いである。

3. 台湾SFと周辺の現状

かつては台湾ではSFが盛んであったが、今はほとんど見かけることはない。そこで、台湾SFの大家である黄海氏²⁵にメールを出し、2011年3月に台北で直接お会いし、いろいろと現状についてインタビューしてきた。

黄海氏によると、現在台湾でSFを発表するのは非常に難しい状況であるらしい。単行本を出すことはおろか、短編を発表する雑誌自体が減ってきているのだという。文芸雑誌もわずかになり、SFだけで食べていくことはまず不可能である、ということである。(中

国大陸でもSF作家専業は非常に少なく、ほとんどが兼業作家である)



(著書にサインする黄海氏)

黄海氏は大学でSFについての講義を担当されているとのこと、世新大学での講義を聴講させていただいた。講義内容については黄海氏のHPに詳しいので割愛するが、SF小説だけでなく映画やテレビなど画像が豊富で、国内外の資料を駆使した視覚的な授業であった。

その後、黄海氏のご好意に甘えてご自宅を訪問、書斎を拝見させていただいた。



数多くの著作を誇る黄海氏だが、SF小説だけでなくSF評論、創作論などについても第一人者である。その存在は台湾だけでなく、中国大陸でも有名で、中国大陸作家たちとの交流も盛んで、中国大陸のSF関連の賞も受賞されている。

黄海氏の一部の作品は、氏のHP上に無料で公開されている。また氏は子ども向けSF



作品も意欲的に執筆されており、筆者も何冊か著作をいただいた次第。機会があれば氏の作品群についても紹介したい。

児童文学つながりで、黄海氏からご紹介いただいたのが、児童文学研究者で随筆家でもある、許健崑氏である。氏は台中にある東海大学、中文系の先生である。日本の児童文学にも詳しい氏のご好意に甘えて、「大象児童文学工作室」でもあるご自宅にお邪魔した。



ご自宅の書斎を学生たちに開放し、好きなきに好きなだけ勉強できるようになってい

る。蔵書量も驚くほどで、これに研究室(こちらはもう一つの専門である明清文学関係が中心)をあわせると相当な数である。



(ご夫妻で親切にもてなして下さった許氏)



この中にはSFやFT要素を含んだ児童文学が多く含まれており、中には日本に翻訳紹介されていないと思われる海外作品も含まれていた。絵本でもSFと思われる作品があり、それらを見せていただき、丁寧に説明していただいた。



特にイラストから一つ一つ読み取る手法には学ぶものが多く、挿絵1枚であっても研究の対象になるのだと、改めて感じさせられた。

また余談になるが、日本での地震があった後、氏は日本人への思いをこめて詩を自作し、送ってくださった。機会があればぜひ翻訳して紹介したいと切に願う次第である。

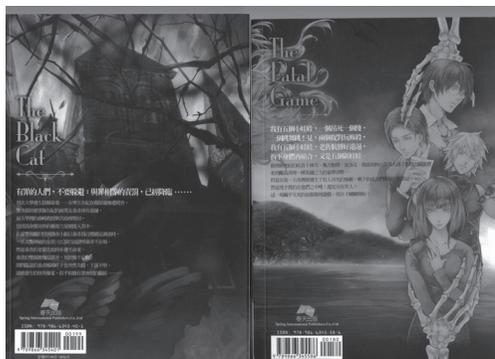
さらに、台北の出版社である、春天出版社国際文化有限公司²⁶を訪問、総編集の莊宜勳氏と編集かつ人気作家の鐘靈女史²⁷にインタビューさせていただいた。



鐘靈女史は日本の小説に影響を受けた部分がある、という若者向けホラー小説が人気の作家で、学園が舞台のシリーズが何冊も出版されていた。最初にコンビニで小さい判型のものを出版²⁸、人気があった場合、改めて大きな版で出版し直すのだという。日本でも「コンビニ本」と呼ばれる、コンビニで売られる本があるが、そういうものが台湾でも存在している。読者のほとんどは学生で、簡単に手に取ることができ、楽に読める、身近な題材というのがポイントだそうである。

春天出版社の出版物は主に軽小説(ライトノベル)で、若者向けのイラストが美しい、装丁の凝ったものが多い。三、四年前に日本から入ってきたライトノベルの翻訳小説が大人気となり、その後、台湾の作家がライトノベルを書くようになったのだそうである。

台湾全体の傾向としては、現在は推理小説



が大人気で、特に日本の作家は人気が高いとのこと。東野圭吾氏の作品は現在大人気で、推理小説専門の雑誌も何種類かある。筆者も日本の推理小説専門雑誌が台湾の書店に並んでいて驚いた記憶がある。もちろん翻訳されたもので、眼にしたのでは「乙一氏特集」などが売られていた。また書店でも推理小説の棚は広く、欧米推理、日本推理ときちんと棚が作られていたことにも驚かされた。

ただ、台湾人による推理小説は人気がなく、日本の推理小説よりも質が低いとみなされているそうである。

一般に台湾の読者は、台湾作家によるSFや推理小説はあまり好きではなく、ライトノベルや愛情小説が好きな傾向にあるらしい。

FT小説は欧米の『ハリー・ポッター』や『指輪物語』などの作品が入ってきて大きな影響を与えたが、登場人物も舞台も欧米的で身近ではなかった。そのため欧米の模倣作品からはじまった台湾FTは、次第にアジア人や台湾人を主人公としたものに変化していった。現在はライトノベルの中に取り入れられ、様々な文化が描かれているが、日本のライトノベルの影響が非常に強く、それらを模倣することによって、ゆっくり台湾化し、独自の発展をしている最中である。

筆者も書店では台湾SFを入手するのにたいそう苦勞させられたが、台湾FTはライトノベルや愛情小説の分野で大量に眼にすることができた。何冊か購入したが、例えば中国

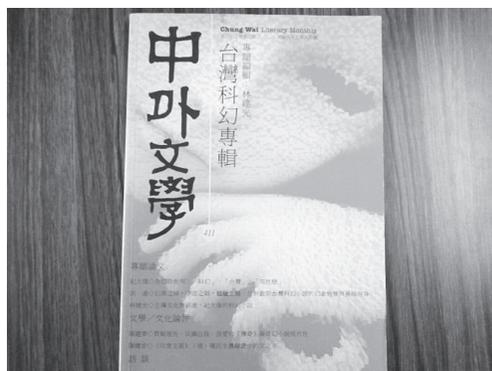
の過去にタイムスリップした現代の少女が主人公だったり、と日本でもよく見かけるような内容で、台湾の独自性がどこにあるのかは今後じっくり読んで比較していかねばならないだろう。ただ、特徴としては『指輪物語』のような壮大な世界観の作品はほとんどなく、身近な世界が舞台になっているという印象であった。

なお雑誌が少ないことについて尋ねてみると、「雑誌はほとんど売れないので利益がない」とのこと。雑誌市場がない理由の一つとして、台湾では連載という形態が好まれない、というものがある。短編も台湾では売れにくく、長編が好まれるという傾向が、小説雑誌の少なさに影響しているのだろう、とのこと。

台湾の国民性が感じられる返答であった。

問題になっているのは海賊版で、インターネット上で海賊版の翻訳小説、翻訳漫画などが氾濫しており、版權をとって正式に出版しようとしても、既にインターネット上で流れているため、販売に支障をきたす可能性があり、出版をためらうこともあるそうだ。

ただ、どのような内容かを確認するのに、こっそり海賊版を参考にすることもあったらしい、と氏は笑って教えてくれた。一概に海賊版翻訳が悪いとは言えない、微妙なニュアンスが感じられたが、日本の作家や編集の間では海賊版に対しかなり強い警戒感を抱いているというのが現実である。(実際に強く抗議している。中国最大の検索サイトで版權を無



視したダウンロードサイトが、抗議のために閉鎖されたのは最近のことである)

ほかにも西洋SF研究が主である林建光氏²⁹にもお会いし、台湾SFについていろいろと質問したが、気がつくところらが日本SFについて語ったほうが多かったような気がする。氏は台湾SF特集³⁰を紀要で編集されており、氏曰く「台湾で初めてSFで博士号を取得した人物が自分ではないか」とのことである。

筆者の帰国後、台北でSF関係者による会合が開かれた(残念ながら帰国翌日だったため、参加できなかった)。「中華科幻学会」³¹が正式に発足、今後、台湾でも精力的にSF活動が行われていくのではないかと期待される。



さらに香港の人気作家倪匡氏³²による台湾星雲賞が停止され、かわりに世界が対象のSF賞³³が創設されたという連絡が入った。詳しくは注を見ていただきたい。

どうやら台湾SFも大きな変換点にあるようである。これからもしっかり観察していきたい。

1 2010年8月8、9日に東京、タワーホール船堀で実施。中国企画は「中国SFナマ報告」というタイトルで午前9時半から11時まで行われた。

2 北京師範大学教授。中国では唯一のSF研究専門の大学院を担当。学者、教育者、評論家、作家として活躍。氏の作品は日本でも「マウスパッド」が『小松左京マガジン』にて拙訳で翻訳されている。

3 科幻の後新生代を代表する奇幻(FT)作家。2004年に『关妖精的瓶子』で『科幻世界』銀河賞最佳新人賞を受賞。以後、アイドル的な人気と確かな実力で第一線にて活躍。代表作に『九州・逆旅』など。

4 『SFマガジン』(早川書房)2007年6月号掲載。林久之氏訳。

5 フリーライター、SF作家、編集社。民間のSF団体42工作組の中心人物で、世界華人科幻協会会員。現在は学術雑誌である『中国科幻研究』の編集を担当している。代表作に『南国的春』など。

6 任紫玉(電子雑誌『新幻界』の「月旦評」欄評論員)、姚嵩(42工作組設立者の一人。長年余暇を利用してSF作家たちのマネージメントを担当)、赵馨源、邓韵(共に北京師範大学科幻協会の会員。邓韵は会長。42工作組の会員でもある)、胤祥(幻想文学雑誌の編集、幻想文学評論家。主な研究対象は20世紀90年代以降の中国大陆幻想文学である)

7 著名な日本人FT作家。

8 日中学院講師、通訳、翻訳家。

9 2007年世界SF大会及び日本SF大会の合同大会が、横浜で開催された。呉岩氏、韓松氏、科幻世界編集長、副編集長などが参加した。詳しくは拙論「中国科幻小説の諸相(1)」を参照されたし。

10 新華社記者、SF作家。哲学的な深みのある作風が特徴で、最近ネット上の雑誌に、大人向けの作品を発表している。中国SFを代表する一人。

11 成都にある老舗のSF雑誌社。『科幻世界』は世界で最も発行部数の多いSF雑誌でもある。<http://www.sfw-cd.com/>

12 『科幻世界』<http://www.sfw.com.cn/html/magazine/qihuanshijie/>、『科幻世界訳文版』<http://www.sfw.com.cn/html/magazine/kehuanshijieyiwenban/>など。

13 日本作家特集を雑誌で行ったり、著作の翻訳シリーズを発行したりしている。もちろん、日本の各出版社と正式に著作権契約をおこなっているのはいうまでもない。

14 <http://bbs.9zfun.com/portal.php>

15 <http://www.nrfsf.com/>

16 <http://42sf.net/>

講義の様子などはhttp://v.youku.com/v_show/id_XMTUyMzYyNDMy.html などネット上で見ることも出来る。また42工作組の活動はテレビで取材され、放映されたほど注目されているようである。

なお2010年の日本SF大会に参加したゲストたちも、10月にはそれについての報告などを行っているようである。

2010科幻大讲堂开幕式-第三只看科幻

——国内，日本科幻大会漫谈

我们邀请了42工作组中曾在今年8月应邀赶赴日本参加东京科幻大会的夏笳，梁清散，邓韵三位组员来为我们讲述在东京科幻大会上的所见所闻，日本科幻迷如何看待中国科幻文化，日本为什么有那么浓郁的科幻氛围，当然还有为什么夏笳会在宴席上被众多日本宅男围观。

同时我们也邀请到了今年8月份去成都参加华语星云奖¥科幻银河奖颁奖式的作者苏学军，杨平，电子骑士（严蓬）等人为我们带来当时的颁奖盛况。

通过对国内外科幻大会的解读，你会对科幻有一些清晰的认识，让你认识一个纸张之外的科幻！

嘉宾

夏笳，苏学军，梁清散，万象峰年，杨平，电子骑士（严蓬），飞氲，陈楸帆

主持人

糖果

17 <http://www.skyaward.org/>

18 日本SF作家クラブ公認ネットマガジン SF Prologue Wave <http://prologuewave.com/>

19 2006年のアニメーション映画。原作は筒井康隆氏の同名のSF作品。

20 小林泰三『玩具修理者』（角川ホラー文庫）所収の短編。

21 2010年8月号（総第1期）第1巻第1期。編輯は北京師範大学中国児童文学研究中心。

22 <http://www.kehuan.net/>

23 <http://sfa.kehuan.net/>

24 たとえば呉岩氏<http://blog.sina.com.cn/wuyan98>、韓松氏<http://blog.sina.com.cn/hansong> など多数存在し、それぞれの作家のブログをチェックするだけでも膨大な量になっている。

25 台湾の著名なSF作家、文学者。著書も大量にあり、大学でSFについての講義も行っている。
<http://sf.nctu.edu.tw/blog/index.php?blogId=3>

26 <http://www.bookspring.com.tw/>

27 編輯としても仕事をする傍ら、ホラー小説を執筆し、特に若者に絶大な人気を誇る作家。

28 口袋本、いわゆるポケット本と呼ぶそうである。

29 国立中興大学外国語文学系副教授。英語圏のSFが専門とのことである。

30 『中外文学』411 台湾科幻專輯（台大外文系）

31 http://wenshan-cu.blogspot.com/2011/03/blog-post_16.html

32 香港の有名なSF作家。その名を知らぬ者はいないというほど人気を博し、映画化、ドラマ化など幅広く支持されている。

33 一、設置宗旨：

公益信託星雲大師教育基金（以下簡稱「本基金」）為提倡現代文學的閱讀與寫作風氣，發掘優秀作家及作品，並獎勵在文學方面有卓越貢獻者，期使文學之美善能有效發揮其淨化社會人心之功能，特設「全球華文文學星雲獎」。

二、組織：

（一）由主辦單位邀聘專家學者成立「全球華文文學星雲獎評議委員會」，敦請其中一位擔任主任委員，負責主持全球華文文學星雲獎之評議事宜。

（二）委員會置執行長一名，下設工作小組，承「全球華文文學星雲獎評議委員會」之命辦理各項行政業務。

（三）另由「全球華文文學星雲獎評議委員會」聘請大陸，香港，星馬及美加地區等專家學者為諮詢委員，協助遴選事宜。

三、申請資格：

海內外對文學創作有興趣之作家，不限國籍，地域，凡以華（中）文書寫者皆可申請，推薦或由委員提名。

四、獎項類別及獎金：

貢獻獎：採主動遴選或推薦方式，獎勵乙名

在文學上有累積性，超越性成就者，可獲獎金 100 萬元，獎座乙座。

創作獎：

- (一) 歷史小說：字數在12—15萬左右，取三名，首獎100萬元，二獎80萬元，三獎50萬元，並各獲贈獎座乙座。
- (二) 報導文學：字數在2—3萬之間，取三名，首獎20萬元，二獎15萬元，三獎10萬元，並各獲贈獎座乙座。
- (三) 人間佛教散文：字數在5—6千之間，取10篇，不分名次，獎金5萬元，並各獲贈獎座乙座。

五、收件期間：

2011年8月1日開始收件，至2011年10月1日截止，掛號郵寄，郵戳為憑，逾時恕不受理。

六、評審方式：

由本基金組織之評議委員會辦理貢獻獎之評議；創作獎之評審，分文類採初，複，決三審制，初審形式審查，由工作小組負責；複，決審由評議委員會聘請之委員會負責。作品未達水準，得由決審委員會議決某一獎項從缺。

七、公布，頒獎典禮：

2011年11月下旬揭曉，暫定12月中旬於台北舉行頒獎典禮。

八、其他注意事項：

- (一) 應徵作品必須未曾有任何書報雜誌，網路發表。
- (二) 稿件請以直式橫書word 12 號細明體繕打，A4 紙張列印，一式5 份。
- (三) 應徵者請另紙書真實姓名，身分證字號，地址，聯絡電話，e-mail，並附簡歷（如附件二）。
- (四) 作品不得抄襲或模仿，揭曉後如發現有此情事並經證實者，將追回獎金及獎座。
- (五) 主辦單位擁有得獎作品之發表權及轉載權，發表或出版時不另支稿酬或版稅。
- (六) 獎金須依中華民國稅法扣稅，由主辦單位先行代為扣除應繳稅額後給付。
(註：得獎者須依中華民國所得稅法規定繳納稅金，競技競賽機會中獎獎金或給與按給付全額扣取百分之十。非中華民國境內居住之個人競技競賽機會中獎獎金或給與按給付全額扣取百分之二十。)
- (七) 郵寄地址：台北市松隆路327號10樓。請於信封上註明參加「全球華文文學星雲獎」。
- (八) 恕不退件，請自留底稿。

(九) 本辦法如有未盡事宜，得隨時修訂並於網站公告。

本研究は科研費（22652035）の助成を受けたものである。